

認知症とは

老化に伴う脳の変性や脳梗塞などによって引き起こされる脳の気質的な疾患です。脳の機能が継続的に低下し、物忘れ、判断力の低下、見当識障害、思考などの知的機能に支障をきたし、社会生活が正常に営めなくなる状態です。

認知症の病型

1) アルツハイマー型認知症

異常な蛋白の蓄積、脳の海馬周辺の委縮による記憶障害と物忘れから始まる事が多い。

2) レビー小体型認知症

レビー正体は脳の神経細胞の中にある異常な物質の一つで、これが大脳皮質と呼ばれる脳の表面の広い範囲に現れると発症する。認知機能障害・幻視・パーキンソン症状を伴う。

3) 脳血管性認知症

脳梗塞や脳出血によって発症・麻痺・失語・失認・失行・遂行機能障害・感情障害・バランス障害

認知症の方への接し方

<落ち着いた態度で接する>

甲高い声は不安や焦燥を招くことがあります。トーンを低く、ゆっくり、はっきり、短く、具体的にまごころをこめて話しかける。

<プライドを傷つけない> (感情は残像のように残る)

命令しない、叱らない、責めない、馬鹿にしないというのが、介護の基本。依存している、甘え、わがままと決めつけない。

<答えやすいように聞く>

心地よい「場」を作り、聞く時は「はい」「いいえ」で答えられるように話すと混乱せずに意思を伝えられやすい。

<間違っていることも否定せず受けとめる>

たとえ間違ったことを話しても、頭から否定することなく、まずは一旦受けいれて話を聞くようにします。間違いを正したり馬鹿にした態度や、からかう事はしない。

<説得よりも安心感を>

説得しても認知症という障害を負った脳では理解することができず、その通りに行動できるとも限りません。委縮させたり、反発させたり、自尊心を傷付けるだけです。

<物取られ妄想への対応>

誤解を生じさせない為に訪問の際私物は少なめに、袋類にも気をつける。また本人の持ち物に興味を示したり、過剰にほめたりしない。

＜上手に話題を変える＞

同じことを繰り返し尋ねたり、主張したりする場合は、上手に話題を変えると、気持ちも楽になります。

＜毎日のリズムを大事にする＞

やれないことをリハビリと称してやらせない。認知症の方にとって、毎日、同じようなリズムで生活することが心の安定につながります。その方の優れた能力と残された力に着目する。

（思い出、季節、得意なこと、人、歌など）

＜できることはしてもらう＞

少しでもできることを見つけ、手伝いながらやらしてもらう。感謝の気持ちを伝えて、役に立っているという気持ちをもってもらう。

＜なぜ？と原因を考える＞

徘徊や暴力、大声などの言動の背景には、必ずそれらを引き起こすきっかけとなる情緒の不安定や健康上の不具合などが見られます。言葉で抑えたりしないで見守る。

＜認知症から見た「世界」を理解する。＞

恐怖に迷い込んだ状態。自分自身が失われていく状態。情報が処理できない。多すぎる刺激。時間のスピードについていけない。心身の異常が認識できない。

認知症状の目安

1) 認知症の境界状態

慣れている仕事の能率が悪い。段取りの手際が悪くなる。

2) 軽度認知症

金銭管理が不確かになる。段取りや計画が立てられない。生年月日の感覚が不確か。

3) 中等度認知症

天候に合わせて服を選ぶことができない。近所以外では迷子になる。表面的な会話は問題ない。買い物を一人で出来ない。入浴や着替えを嫌がる。

4) やや高度の認知症

順番に服を着ることができない。着衣に介助が必要。入浴後も身体を拭けない。洗髪ができない。近所でも迷子になる。失禁もこの時期に起きることが多い。同居していない家族が解らなくなる。表面的な会話のつじつまが合わない。

5) 高度の認知症

着衣・入浴・身辺整理には全面介助が必要。同居家族がわからなくなる。家の中のトイレが解らない。最終的には自発的な発語は消失し、寝たきり状態となる。